

最近の中高年登山者は、ちょっとした不注意から一般登山道で道に迷うケースが多いという。「道迷い」と言われるそうした山岳遭難が生死の境をわけるような大事に至ることも多々あるようだ。彼らに地図を読む技術があれば、道に迷うことも未然に防げたかもしれないし、気づいた時点で正しいルートに戻ることもできたはずである。

本書はそうした道迷い遭難の事例をいくつか紹介しながら、道迷いに陥る心理的背景を分析、「なぜ山で道に迷うのか」の答えを導き出そうとする試みから始まる。続いて地図の種類と利用の仕方、現在地を確認しながらルートを維持する方法を詳しく解説し、最終章で実際に地図を正しく読みながら目的地に間違いなく行けるナビゲーション技術を習得できる構成になっている。

副題に「道迷いの心理とナビゲーション技術」とあるように、短時間で効果的な地図を読むためのコンパスの使い方など、登山者だけでなくオリエンテーリングの競技者にも有効なノウハウが紹介されている。また5万図や2万5000図とコンパスを使う読図法だけではなく、GPSセンサーや高度計を使った読図法も紹介するなど、最新の読図法にも力点がおかれている。さらに地図と写真、挿し絵などがふんだんに盛り込まれ、わかりやすさと実戦的な記述に重点がおかれているのも本書の特徴であろう。

著者は、14歳からオリエンテーリングを始め、19歳から33歳まで全日本選手権を15連覇した日本のオリエンテーリングの第一人者。現在はオリエンテーリングのコーチとして、地図読みやナビゲーションテクニックを競技者に教えている。それだけに使用者の側にたった、キ

メの細かい技術所となっている。
(山と溪谷出版部 神長幹雄)

著者からの一言

僕がオリエンテーリングを始めたのは、潜在的には親の影響が大きかったと思う。両親とも山好きで、時々山に連れていってもらった。そのためか、今でも時々山歩きに行く。

山を歩く以上、地図とコンパスを持ち、常に現在地を確認しながら歩くのは当然だ、と思っていたが、山の世界にはその常識は通用しない。地図も持たず、最低限のナビゲーション技術も持たずに山歩きをしている人が多いのだ。そして、実際かなりの数の人が、遭難には至らないにしても、道に迷って山野を彷徨している。

オリエンテーリングは山歩きとは違いますが、オリエンテーリングで有効なナビゲーション技術は山でも有効なはずだ。それを広めることで、オリエンテーリングの知名度向上にもなるし、登山者の安全も高まる。本書執筆の動機はそれだ。

国体の山岳競技の選手ですら、事情はあまり変わらない。彼らは成績を競ってい

るにも関わらず、その成績につながるナビゲーション技術をおろそかにしている。

オリエンティアは、ナビゲーション技術という点では、最先端にいる。スウェーデンでは、山野での遭難があると、地元のオリエンティアが捜索にかり出されるという。この技術と知恵は誇りに思っているし、また社会にも還元できる資産だと思う。

「道迷い遭難を防ぐ最新読図術」
2001年1月「山と溪谷社」A
5版192ページ 1700円

